

# 魚紋

吉川英治

青空文庫



お部屋様くずれ

一

今夜も又、この顔合せでは、例によって、夜明かしとなること間違ひ無しである。

更けても、火鉢に炭をつぐ世話もいらぬ程の陽気だし、桜花も今夜あたりでおしまいだらう、櫺子の外には、まだ戸を閉てない頃から、春雨の音がしとしとと降りつづいてた。

パチ…… パチリ

梶の柀目の盤が三面、行儀よく並んでいた。床の間へ寄つた一面は空いていて、紫ちりめんの座ぶとんだけがある。那智石の白へ手を突つ込んで、

『さアて。……』

弱つた顔つきを、近視のように盤へ近づけてうなっているのは、ついこの近所の山岡屋

という、質屋の番頭。

質屋というと、堅気かたぎの中でもかちかちの吝嗇屋しまりやらしく聞えるが、専らもっぱ商売しょうばいになってゆくのは、盗品けいずかい買だというわさのある質屋なのである。で、その番頭という才助さいすけの眼もどこか鋭かった。けれど、男ぶりはちよつと好くて、年頃も、ここへ集まる中では一番若い二十四か五ぐらい。

パチ？

『なる程。妙手みょうしゅもあるもののだの』

相手は医者いしやの玄庵げんあんだった。

外科げかでは上手と云われているが、脂ぎった五十男で、仁術じんじゆつという職業には余りに体力的な人物だった。道楽が多いらしいのである。いつも高利を借りて苦しんでいる。第一病家を廻っている時間よりも、この碁会所碁会所にいるほうが遙はるかに多いという医者様だった。

二

『濟まないが、今度はもらったぜ』

一局、勝敗がついたとみえ、盤の下にかくしてある賭金を、攫うように懐中へしま  
いこんで、

『——何うだな、其つ方の風雲は』

云いながら、隣りの対局へ、横から顔をつき出したのは、横よこびんに黒い刀かたなきず傷のある  
村安伝むらやすでん九郎ろうろうである。

これは御家人と自称している男で、三十がらみの苦みばしつた骨柄であつた。背が高く、  
手脚が長くそして、瘦せているので、岡場所などを通ると売女おんなたちが、

(蠅螂かまきりさん——)

と綽名あだなして呼ぶ。

その蠅螂さんと対局して、今、賭けておいた幾らかの金を取られ、悄しよんぼりと、もう石を  
崩くずした盤を、いつ迄、未練げに眺めていたのは、浮世絵師の喜多川春作きたがわしゆんざくだつた。

気が弱くて、闘志がなく、おまけに碁はカラ下手と来ている春作は、よせばいいのに、  
毎晩ここへ来なければ寝られないと云っている、来れば又、必ず鴨かもなのだ。

(何の因果か)

と、自分でもこぼして居ながら、今夜もいつ迄、帰ろうとはしない。

もう更けているので、よく流行るこの碁会所も、帰る者は帰ってしまったのであろう、座敷に居て、夜も知らないのは、こう四名だった。

後は——この碁会所の主が一人。

今し方、夜食の鮓が台所へ入ったから、茶を入れる支度をしているのであろう、茶の間のほうで瀬戸物の音がしている。

『かまきりさん』

そこから声がして、

『もう、お鮓を出してもよござんすか』

伝九郎は舌打ちして、

『よしてくれ、かまきりなんて呼ぶなあ。——悪党じゃあるめえし』

『ホホホホ。だって、呼ぶ人がきれいな女だと、振向くじゃないの』

『からかうのか、師匠』

『よそう、おまえさんが怒ると、ちよつと凄<sup>すじ</sup>いからね。——お鮓は』

『まだ、山岡屋と玄庵の勝負が片づかねえから、もすこしの間、そっちへ置いといてくれ』

『だいぶ大<sup>おおしくさ</sup>戦だとみえますね』

そう云いながら、碁会所の女主人あるじは、茶の間から出て来た。髪を切下げかみにしているけれど、年はまだやつと二十四、五にしか見えない。いつも被布ひふを着て崩したことがない。十六の頃からさる北国の大名のお部屋様として栄華をしつくして来たが、その大名の近習きんじゆの者と恋をして、やがて浮名が立つと、腹を切った男をすてて、自分ひとりで越後えちごから江戸まで逃げのびて来たという履歴たしなを持っていた。

さすがに、琴、茶、花、何でも嗜みたしながあつて、絵もすこし描くし、わけて碁は生れつきの才分とみえ、大名の奥にいた頃、宗家から女で四段の許しをもらっていた。

——お可久様かくさま

近所の者や御用聞きは、みな「様」をつけて呼んでいた。この本所ほんじよの裏町では、彼女の高貴みなりめいた身装みなりだの端麗たんれいな目鼻立ちが、掃溜はきだめの鶴と見えるらしく、妙な尊敬を持つのだった。

お可久様も又、それを当然として、内輪うちわでこそ砕けているが、往来へ出ると頭ずが高かつた。

(あの女ひとは元、大名のお部屋様だったのだそうだ)

(道理で、品がある)

(町女には、ああいうのは居ない)

(すごいな)

頭の高いのがよく見えるのだから可笑しい。彼女が、今の家に、囲碁指南のかんばんを掛ると、かねがね、眼をつけていたのが早速に集まった。

ずいぶん贅沢をやつて暮しているが、それは蟻のように皆、甘い男たちが運んで来るらしい。もつとも初めは指南だけであつたが、いつの間にか、賭碁が専らになり、そのほうの収益も尠くない。そしてお可久様を張りに来ている連中も、だんだん筋にかけられて、粘り強い者だけが、今では、碁盤の外の勝敗に鎬を削つていたのであつた。

浮世絵師の喜多川春作。

山岡屋の番頭才助

御家人のかまきり。

それから外科医の玄庵。

——と、こう四人は、その中でも、毎晩のように詰かけて、碁には負けても、そのほうでは一歩も退かない意気を示している徒輩であつた。



彼の世からの使

一

『両国鮓かい、白魚の鮓なぎ、ちよつとおつだな』

『師匠、すまないが、茶をも一つ』

次の部屋へ座蒲団をうつして、茶卓を囲みながら、四人は笑い興じた。

そうしている表面の様子は、囲碁仲間の睦じさの他、何も険悪らしいものは無さそうだが、よく見ると、お久ひとりりを繞つてうごく四人の眸には、かなり複雑なものがある。

『忌々しいのう、山岡屋さん、おぬしには今月に入ってからもう七、八両がとこ奪られているぜ。もう一局行こう』

医者 of 玄庵は、鮓を食べ終ると、早速に又、盤の前へ戻って先に坐りこんでいる。

山岡屋の才助は、落着き払って、

『およしなさいよ。今夜はもう』

『なぜ、なぜ』

『相手を換えて、春作さんと打つてごらんなさい。どうも、玄庵さんとやれば、金はただ貰うようなもんだが、嬰兒あかごの手を捻ひねるようで、張合はりあいがない』

『ば、ばかにしなさんな。さア、もう一番』

玄庵が力りきみ返ると、みんな笑った。そして、かまきりの伝九郎が、

『じゃあ、おれが一手ひとて、御指南しようか』

『ム、幾額賭いくらく?』

『これだけ』

二分銀を盤の下に置く。玄庵も金を出しかけた。

——すると、お可久が、

『おや? ……風かしら?』

春作は、気の小さな眼をして、

『風じゃありませんよ。誰か、戸外おもてで戸をたたいているのだ』

『誰だろう、今頃。——婆やは寝かせてしまったし……』

眩つぶやきながら、お可久は起つて行つた。もう玄庵と伝九郎はパチパチ石を打ちはじめている。

戸の開あく音がした。その隙間から湿しめっぽい風が奥まで流れこんで来る。お可久は、何か暫く戸口に立つて、闇の中の人影と囁ささやいていたが、やがて座敷へ戻つて来ると、

『山岡屋さん……』

と、眼で呼んだ。

『え？』

『お前さんに用事の人らしいよ、行つてごらん』

『へえ……はてね？ ……』

お可久に従ついて、山岡屋が部屋を出て行くと、碁を打っていた玄庵も、かまきりも、ジロと其の方へ眼をやつた。

山岡屋は、暗い格子戸の外を透すかして、

『——誰だい？』

と、云つた。

廂ひさしの雨だれに打たれながら、頬ほお冠かむりをした男が、その上から又赤合羽あかがつばを被つて、ぼ

んやり立っていた。

『あなたが、山岡屋の才助さんで』

『そうだよ』

『今、お店のほうへ参りましたら、この碁会所にいと伺いましたので、やって来ましたわけ』

『雨が吹ツ込むじゃねえか。用向きは一体何だよ』

『恐れ入りますが、ちよつと、此処ではお話し申し難い事なんです。——戸外まで顔を貸してくれませんか』

『馬鹿を云つちやいけないよ、この降りに出られるものか。ここは心やすい家だから、何も気づかいは要らないぜ』

『でも、何うもその……』

煮え切らない男だった。第一風態を見ても、職業がわからない。屋敷仲間でもなし、若党わかとでもなし、凡の町人ただとも見えないのである。

お可久は、後に立っていたが、

『じゃあ、二階が空いているから、二階で話しては何うですか』

すると、雨の中で、考え込んでいた合羽の男は、  
『あ。……そう願えれば』

と、救われたような顔をお可久へ向けた。

## 二

パチ——と一石<sup>せき</sup>布<sup>お</sup>いて、かまきりが、横を向き、

『師匠、今、二階へ上って行つたのは？』

『知らない人さ』

『でも、山岡屋が一緒だろう』

『何か、内<sup>ない</sup>密<sup>しよ</sup>話<sup>ばなし</sup>があるつていうから、二階を貸してやったまでさ』

『情婦<sup>おんな</sup>か』

『嫉<sup>や</sup>くような筋じやない。何処の者かしらと思つて、今、その男の脱いで行つた合羽を見たら、裏に伝馬<sup>てんま</sup>役所と黒印が捺<sup>お</sup>してあるじやないか。ホホホホ、伝馬の牢番か何からしいんだよ』

『牢番が。……牢番が何して来たのだろう』

と、これは喜多川春作が呟いた。

玄庵の打った石へ、すぐ白を一石打って、かまきりも話に口を出した。

『おかしいな？ 伝馬の者が、こんな夜更にこっそり訪ねて来るなんて』

『だって、山岡屋じや、内密で盗品買もしているというから、牢屋敷の者にだって、まんざら縁故がないわけじゃないだろうさ』

『町方役とか、牢役人などが、袖の下を取るのはおおび——それにしても、牢番なんて下ツ端までが小費をせびりに来るのかなあ』

『おおかた、そんな事だろうよ』

お可久は、鮎の皿や汚れ器を、台所へ片づけて、風呂に入った。

』

かまきりと玄庵の勝負を、春作はつまらなそうに横からのぞいていた。いつでも持って来ただけの金はここで損つてしまふ春作なのである。これから、火の気もない家へ帰って、一枚摺の彩絵や読本の挿絵を描く気にもなれないのであろう。倦んだ顔いろをしながらも、碁を眺めていたけれど、耳は、風呂場の方でする小桶の音を聞いて、湯気の中にお可

久のすがたを想像しているのかも知れなかつた。

——と、廁かわやへ立った帰りに、春作はふと梯子段はしごだんを見上げた。ぼんやりと、上の障子に明りが映っている。

『いやにシンとしているが？』

何か内密ないしよ話らしいと云つたお可久のことばがまだ耳にあつたので、ふとうごいた好奇心だつた。

そつと、ふた段、三段と、跫音あしおとをしのばせて、梯子段の途中に凝じつと立っていた。

三

『ほんとに、和尚鉄おしょうてつがそう云つたのか』

『へい』

『いつ召捕あげられたんだ』

『伝馬牢へ下げられたのが、後月あとげつの八日ようかでした』

『すると、お前さんは、その和尚鉄に付いている牢番なんだね』

『夜昼、一日措きに、番代りがおりますから、他にまだ二人ほど相役あいやくが居りますが、その者たちには何も打明けてはごさいません。和尚鉄が、私にだけ話した事なんで』

『ふーむ。……何か証しるしを持つて来たかい』

『手紙を持つて来ました』

『よく御牢内でそんな物が書けたな』

『それやあ、私が、そつと都合をつけますからね。……今夜は、私は非番なんで、実は、こつそりお訪ねに上つたわけで』

濡ぬれている着物の懐ふところ中を探つて、牢番の男は、一通の手紙をさし出した。

山岡屋才助は、行燈あんどんをよせて、

『ム……。こいつあたしかに、坊主の鉄雲てつうんの筆てだ。あの偽にせ和尚も、ずいぶん悪事をかさねたから、もう年貢ねんぐにかかつてもいい頃だろう』

『ですが、残念がつて居りますよ。折角せつかく、一生一度の大仕事をやった所で、縄になつちやあ何にもならないと云つて』

『此の手紙には、詳しい事は、使つかの口から聞いてくれとあるだけだが、先刻さつきは、藪から棒の話なので、半信半疑に聞いていたのだが、一体、小判で七百両の金を、何うしたつて云



うのか。もう一遍、よく飲み込めるように話してくれないか』

『へい、その使に來たんですから、何遍でも話します。——実は、和尚鉄が、これを打ち明けて、あなたに頼むのも、何うやら今度は御処刑も獄門と極りそうなんです』

『ム、軽くてもまあ、その辺だろうな』

『するともう二度と、この娑婆にやあ戻れませんか。——そこで折角の七百両を、あの儘にして置いちやどうも、死ぬにも気にかかるし、同じ誰かに取られるなら、他人に渡すのは業腹だから、山岡屋さんの手に揚げて貰つて、石塔の一つも建つて貰えれば有難いし、運よく、遠島とでもなつて、娑婆の風にふかれる日があつたら、そのうちの幾分でも、助けて貰えれば嬉しいと——こうまあ当人が云うわけなんでございます』

『よく分つたが——其処でその七百両の金を沈めてあるという場所は？』

『永代橋の西河岸で、橋の袂から川下流のほうへ、足数にして十五、六歩ほど歩いた所の川の中だそう。——あの辺にや、杭が多うございますが、その杭よりも外側へ投げこんだと云いましたか』

『金はバラでだろう？』

『いいえ、七百両みんな封金で、そいつを、餅網に入れて口を縛つてあるとの事ですか』

ら、川の水が増しても、流れて場所の変る気づかいはございません』

『餅網とは、うまい物へ入れたものだな』

『中洲なかすの米屋の隠居所へ押込に入つて、それだけの金を盗ったはいいが、重いので持つに

も困つて、女中部屋から餅網を見つければ、それだけ金を入れて、悠々と担いで来る所を、女

橋んなばしの辻番小屋から六尺に尾行つげられたので、まだ、逃げきれぬつもりだったんでしよう。

その金を、河岸から川の中へ抛り込んで、一目散いちもくさんに逃げ出したらしいんです。——所が、

黒江の辻まで来ると、運わるく、町見廻りの旦那衆にぶつかってしまったので、前うしろと後の

両方から挟み撃はさみうちを食つて、さしもの和尚鉄も縛り上げられてしまったわけだし』

『白洲で、金の事は申し上げてしまわなかつたのかなあ』

『出鱈目でたらめを云い通したんでしよう。お上でも分らず仕舞じまい、米屋の隠居所でも、泣き寝入り

となつています』

『じゃあ、和尚の鉄雲は、その川の中の金を俺ひきあに引揚げてくれ——とこう云うのだな。お

れに譲ゆずるといふんだな』

『……で、誠に何ですが、その、私も首を賭けて、こういう危い使いに来たのでございま

すから、そこをお酌くみ下すつて、幾分かなの所を山岡屋の手から頒わけてもらえと、和尚鉄も

申しましたので』

『そいつあ分つているよ。だが、嘘じやアあるまいが、一応、ほんとに川底に、金が有るか何うかを、確めた上でなくつちや、お前さんにも礼はやれないぜ』

『元より、只今すぐには申しません。いずれ又、改めて、夜分でも、お店のほうへ上る事にいたしますから——』

牢番といえ、伝馬者のうちでも、ひどい薄給と極っていた。さだめし、女房子をかかえて苦しい生活をしているのである。いかにもいじけた——恟々した眼で、密談がすむと、すぐ起つて、障子しょうじを開けた。

『……あつ。』

と、吃驚びっくりしたような声をもらして、喜多川春作は、梯子段はしごだんの中途からあわてて、階下たへ影をかくした。

『——誰だ、立ち聞きしていやがったのは』

山岡屋が、そこから覗き下ろした時は、勿論、誰もいなかった。

梯子段の下で、牢番の男が、

『じゃあ御免なさいまし。……お邪魔をいたしました』

と、せむし 僂儂のような背中を見せて、挨拶していた。

『誰か知らぬが、虫のすかねえ奴がいる。人の密談を盗み聞きなどしやがって……油断も隙もなりやしねえ』

あんどん 行燈の下においてある煙草入を取って、ぽんと筒を鳴らし、梯子段を下りかけようとする、ふすま 襖の閉まっている次の暗い部屋で、

『ムーツ……。ああよく寝た』

ふいに誰か、不遠慮な欠伸あくびをしていた。

#### 四

山岡屋は、ぎよ 恟つとして、足をすく 竦めた。

まるで、天から授さずかり物のような今夜の使の話なのである。有卦うけに入るといふのはこんなことだろうと独りで悦に入っていたのだ。

所が、もう梯子段で、誰か、盗み聞きしていた奴がある。それにさえ、しまったと思っ  
ていると、この二階には、まだ他に寝ていた人間があったのだ。

最初から、こういう話と知っていたのなら、充分に注意をするのだったし、雨などは厭いとわ  
ず戸外へも出たのにと、今になって、後悔された。

『……いけねえ、煙草盆たばこぼんの火が消えていやがる、おい、誰かそこにいるらしいが、行燈  
の火を、ちよつとここへ貸してくれ』

襖ふすまの中からそんな声がした。——山岡屋が開けてみると、丹前たんぜんを被つて、腹這はらばいにな  
つている男が寝呆ねぼけ眼をあげ、

『おう、山岡屋か』

と、銀歯を見せて笑つた。

薊あざみと緯名あだなのある遊び人の芳五郎よしごろうだった。——悪い奴に、と山岡屋は眉をひそめて、

『煙草の火なら、贅ぜいたく沢を云わずに起きて来たらどうだ』

『そうさなあ。……もう朝か』

『馬鹿を云え。夜半よなかだ』

『夜半に、何の客だ、今帰けえつたなあ』

『薊あざみ』

『む? ……』

と、行燈の燈とうしん芯へ雁首がんくびを入れて、

『——いやに怖い顔をするじゃあねえか。何だい？』

『おめえは、今の話を、聞いていたな』

『そう云われて思い出した。——夢かと思っていたが、じゃあ今ここで、密々ひそひそ云つてい

た二人の話はあれあほんとの事か』

『それよりも、おめえは一体何だつて、こんな所に寝ていたんだ』

『大きなお世話だろうぜ。おれはこのお可久の情夫まぶだもの』

『ふうム……そうか』

『——と、まあ自分だけで己惚うぬぼれているのさ。だが、今の話を聞いたからつて、こいつあ何も俺が盗み聞きしたわけじゃねえ。おめえの方から、俺の枕まくらもと元へやつて来て、勝手に喋しゃべりちらしたんだから、此このさき先とも、何う事が成り行こうと、俺の罪じゃねえぜ。それだけは断つておくよ』

薊の銀歯はセセラ笑いながら、暗に何ものかを挑戦していた。男ぶりから云つても、悪事の腕にかけても、山岡屋の才助は、一步の負け目ひをこの男には感じずに居られない。

凝じっと——顔いろを讀んでいたが、折れて、

『兄哥。……何もそう俺は尖っているんじゃないやねえ。おめえの枕元で、あんな話をしたというのも、これや矢張り、おめえにも運があつたと云うもんだ、どうだ。この仕事は、乗で行こうじゃねえか』

薊は、うすい笑をのぼせて、あつきりと、首を振った。

『いけねえ。そいつア断る』

『なんだと』

『山岡屋、てめえ、煙管を斜につかんで、何うする気だ。——七百両を乗でゆけば、取り分は半分になる。勿体ねえから嫌だというんだ。おらあ一人であの金を揚げるんだから』

『ふ、ふざけた事をいうな』

『何を息り立つすじがあるか。てめえの金じゃあるめえし……』

『ようし！……。おれも山岡屋だ。取れるものなら取ってみろ』

『一割もくれというなら、手伝わせてもやろうが、さもなければ、虻蜂とらずになるぜ。はははは、どれ、階下へ行つて、面でも洗おうか』

二階の荒っぽい話し声を、階下でも変に感じたのであろう。玄庵もかまきりも、碁をやめて、天井を仰いでいた。

だが、そこへ下りて来た薊と山岡屋は、もう何も気色ばんだ顔いろはしていなかった。  
『よう、又夜明かしか』

薊は、にやにや云うし、山岡屋は

『おや、春作さんは、もう帰ったんですか』  
と、見廻して坐りこんだ。

その春作は、風呂ふろから上ったお可久と、台所部屋の隅で、何かヒソヒソ話していたが、  
やがてそつと傘を借りて帰って行った。

### 波紋魚紋

—

『——嘘かな？』



山岡屋は、小舟の縁へりから、落ちこみそうに、川の中を覗き込んでいた。

独りで漕こいで来た貸船を、永代橋から少し下流しもの所を約二十間ほどの間、あっち此こつ方ち漕こぎ廻まわつて、

『はてな、たしかに、この辺だと云ったが？』

朝の空があまり晴れているので、雲が水面に映つて見にくいのである。けれど水はよく澄すんでいた、白い瀬戸物の破片かだの、俵はだの、傘の骨などはよく見える。

『も少し、真ん中のほうかしら』

考えてみると、河床かわとこは、河心かへ向つて、だんだんに深くなつていたので、雨ふり揚あげ句くの水み嵩すが増した時などには、其の方へだんだん移動してゆくのが自然だった。

棹さを入れてみると、だいぶ深い。彼は、夢中になつて、突つ立てては船を移した。底の沼ぬま土つちが、むらむらと浮いて、水はいちめんに暗くなる。然し、流れが早いので、又すぐに澄すみ返つた。

『……あつ、あつた』

棹は水面へ抛つてしまった。そう深くも見えない所だ。青々と水が渦うずを描えいている。両手を眼にかざして覗きこむと、雑魚ざごの影さえ透といて見えるではないか。

封金の封紙が洗い流されてしまっているの、おびただ夥しい山吹色の黄金が、すはだ素裸で水に研とが  
れているのだった。

『ウーム、なるほど成程、あみぶくろ網袋に詰っている』

いくら見ても見飽みあかない山岡屋の顔つきだった。今にも、何とかして引き揚げてしまいたいが、対岸に、船番所のある事、河岸をゆく往来の者が、ともすると立ち止まること、物売り船や荷足にたり船が絶えず上下しているの、すぐ感付かれてしまいそうな事――

『……駄目だ、昼間は』

勿論、昼間行動できない事は考えていたので、用意の為、袂に入れて来た白い碁石を、彼は、金の沈んでいる附近へ、夜の目印の為、ザラザラと船まべりから撒いた。

そして、何食わぬ顔して、永代橋の下を漕こぎ戻つてくると、

『山岡屋、山岡屋』

欄干の上から呼ぶ者がある。

ハッと、彼は、薊の顔を思い出した。だが、橋を片手に、仰向いてみると、それは芳五郎ではなくて思いがけない外科医の玄庵だった。

『お、先生ですか、どちらへ』

『おまえこそ、何をしているんだ。だいぶ熱心らしいが』

『——お天気がよいので、気散きさんじに、雑魚ざこでも釣ろうと思ひましてね』

『うそを云え、雑魚ではあるまい』

『えっ』

『聞いたぞ』

『だ、だれに』

『まあいい』

『先生つ、ちよつと、話がありますから、待つておくんなさい』

あわてて、船を岸へ寄せ、山岡屋は陸おかへ飛び上つてみたが、もう玄庵のすがたは、橋の上に見えなかつた。

二

ふしぎな現象である。急に、お可久の碁会所へ、常連の寄りが悪くなった。

もつとも、来る事は、相変らず朝となく夜となく来るが、顔が合つても、誰も、碁を打

たなくなつたのである。一分二分の賭博かにも、昂奮かが失くなつた様子なのだ。

『はてな？』

かまきりの伝九郎は考えた。

彼だけはまだ何も知らないのです、この現象が不審ふしんでならなかつた。

『——おかしいぞ。春作が、いやにそわそわしている。玄庵の奴も、来ても、妙に腹に一物もつという風だ。……山岡屋が誰よりも変だし、彼のするどい薊あの眼にも、何かこの頃、思お惑もがあるらしい』

頻しきりと、犬のように、人の顔つきを嗅かいでいたが、分らない。

お可久に聞いても、笑っているだけなのである。

すると、或る夕方。

『伝九郎さん、一杯、交際つきあつてくれませんか』

と、山岡屋が誘う。

どこへ引つ張つてゆくかと思うと、深川の櫓やぐら下した妓おんなまで呼んで、この男にしては、解げしかねる散財さんざいだつた。

『時に、折入つて、頼みがあるが』

と、果して、その晩の帰り途、こう切り出しての話に、

『うまく行ったら、百両やるが、乗らないか』

『途方もない儲け話だが、何だい、それは』

『一人、殺<sup>や</sup>つてもらいたいのだ』

『人間をか』

『当りまえだろうじやないか』

『待つてくれ、百両で人ひとり……。相手に依るなあ』

『薊<sup>あざ</sup>だ』

『……えつ、あいつを』

三

書肆<sup>ほんや</sup>からは頻々<sup>ひんびん</sup>と矢の催促をうけるので、版木彫<sup>はんぎぼり</sup>と刷<sup>すり</sup>をひき請<sup>う</sup>けている彫兼<sup>ほりかね</sup>の親<sup>お</sup>爺<sup>やじ</sup>はきようも、絵師の喜多川春作の家へ来て、画室に坐りこんでいた。

『困りましたな。もうこの三月の初めにや、とつくに刷も綴<sup>とじ</sup>も出来て、版元へ納まってい

る筈なんですぜ。——絵が出来ないばかりに、彫にもかかれず、手前どもの職人の手も空<sup>あ</sup>いちまっているんです』

『すまない、今日は描く』

『その今日が、四十日も持ち越されちやあ』

『きつと、今日いっぱいには』

『お邪魔でも、待たせておいて頂きましょう。もう、手ぶらじゃ帰れませんから』

『そんな事をいわないで、今日——今夜だけ、待つておくれ。——今夜こそ、徹夜<sup>てつや</sup>をしても、きつと描き上げてみせるから』

『ほんとですか』

『大丈夫』

——だが、彫兼が帰ると、春作は、机に、ぼんやり頬づえをついた儘、半日も、何か考<sup>あ</sup>えこんでいた。

(そうだ)

われに返ったように、雁皮紙<sup>がんぴ</sup>へ絵筆を執り出したが、いくら描いても、反古<sup>ほんこ</sup>を作るばかりだった。そしてしまいには、無数の女の顔を、徒ら<sup>いたず</sup>に描き初めた。その女の顔は皆、お

可久に似ていた。

『……あの七百両の金が手に入れば』

筆をおくと、そんな事を考えた。恋の為に、金の魅力だった。然し、彼にはそれを自分の物にするだけの自信がない、勇気がない、悪智がない。

あの事を、耳にした晩、春作はすぐ、台所部屋のすみで、お可久にその秘密を話してみたが、お可久は、大してそれに昂奮もしなかった。ただ、

『春作が、それを手に入れたら、夫婦いっしょになつてあげてもいいね。江戸を売つて、京都あたりでちんまりと暮してみたい。もう、こんな暮会所なんて懲々こりこりだから——』

そんな事を囁ささやいたきりだった。春作は、幾晩いくばんも幾晩も、永代河岸を歩いてみた。だが、河の中へ入つてゆく気になれなかつた。水が怖いのではなく、世間の眼と世間の灯が、いつも背後うしろで気になつた。

『ああ、わしのような気怯きおれ者は、何をしたつて、生きて行く力が足りない。体は弱いし、絵は上手うまくならないし……。悩むために生きているようなものだ』

ふらふらと引窓ひきまどの下へ行つたのである。夕方の星が、四角な狭い口から白っぽく見えた。春作は、引窓の綱にすがつて、泥竈へっついの上に乗つた。

首へ綱をかけ、足を外した。——死んだと思つた途端に、上の横竹が折れたのか、古い綱が切れたのか、春作は、流しの手桶の上へ、ひっくり転かえつていた。桶の水をかぶつたので、思わず、大きな声を上げたらしい。

『おやつ、何うなさいましたか』

と、隣家となりの女房が、駈けて来て、抱き上げてくれた。

#### 四

七あいくち首をつかみ、解けかけた帯の端を左の手で持ちながら、薊あざみの芳五郎は、脱兎だつとのように、木場きばの材木置場の隅へ逃げこんで行つた。

すぐ、後から追い込んで行つたのは、かまきりの伝九郎だった。青い月が空にある晩で、元よりこの辺は人通りもなかった。

『野郎つ。出て来い』

かまきりは、大刀を提ひっさげて、材木の下を覗いた。

横たわっている材木の枕まくらぎ木の奥に、薊あざみは、竦すくみこんでいた。



『かまきり、何だつて俺を。……何も俺に意趣いしゆも恨みもあるめえに』

『所が、大有りだ。てめえは、お可久を狙つてゐるだろう』

『お可久の事なら、俺は、手をひいてもいい。何も、女早ひでりをしてゐるわけじゃなし』

『いや、何うあつても、汝てめえの生命は欲しい。出て来い。うぬ、出て来ねえなら』

刀を突つ込んで、闇を搔かきまわ廻すと、

『待つてくれ、かまきり』

『遺言があるなら、今のうちに云え』

『おめえは、山岡屋に頼まれて、俺を殺してくれと云われたのだろう』

『それが何うした』

『読めた。おめえは、お人好しだ。何も知らねえんだ。騙だまされてゐるのだ』

薊がまは、材木の奥へ、墓がまのように身を避さけた儘、そこから必死の弁をふるつて、山岡屋が和尚鉄の沈めた七百両の金を河から揚げようとしている目企もくろみをすっかり喋しゃべり立てた。

『おめえに、幾らその頒わけ前を出すと云つたのか知らねえが、金なら俺がやろうじゃねえか。二人で組んで、和尚鉄の金を、山分けにしてもいい。お可久へも、おれはもう手を出さねえから、生命いのちだけは助けてくれ』

薊からそう聞いて、かまきりは、初めてこの頃の事態が領けた。そして、百両で自分を操ろうとした山岡屋を憎んだ。

『そうか、じゃあ今の話に、嘘はねえな』

『嘘だと疑うなら、これから山岡屋へ行つて、二人で坐りこんで対決してもいい』

『おもしろくなつた。薊、もう安心して出て来るがいい。実は、山岡屋から殺してくれと頼まれて、汝に、喧嘩仕掛を吹ツかけたのだが、もうやめて、その代りに、和尚鉄の金には、俺の息もかかっていると思つてくれ。百や二百の領け前じゃ承知しねえぞ』

『いいとも、生命さえ……。ああ、冗談じゃねえ、あぶなく死神に取ツ憑かれるところだつた』

『今の話を、もうちつと詳しく聞きてえが』

『いくらでも話すが、おら、もうこんな寂しい所じゃ』

『大丈夫だつて云うのに、何も好んで人殺しなどはしたくねえ。ただ、その七百両の一件だが』

『蛤鍋屋へでも行つて、飲みながら話すでしょう。こう、襟くびが、何時までもぞくぞくしやがつていけねえ』

『口ほどもねえ悪党だ』

『こゝろ見えても、おら、割合に気が小さいせえんだ』

と、着物の土を払いながら、かまきりの背後うしろへ廻ると、不意に、相手の脇腹へ抱きついた。

『わッ！ ……。ち、ち、畜生っ』

かまきりの伝九郎は、全身でもがいた。薊あいくちのヒ首ひぼらは彼の脾腹ひぼらにふかく入った儘離れなかつた。狂う程かまきりは自ら血をしぼって。その血は、月に青光りして、あたりの鋸おがく屑ずに斑々とこぼれた。

白い碁石

一

自分が見廻らない時は、他人を番に立たせておいて、山岡屋は、永代河岸を警戒させていた。

それでも尚、彼は不安であつたとみえ、そこから近い菖蒲河岸の団子屋の二階を借りて、たいがい其処へ来ていた。

あれから、何度も船を出して、鈎繩を下ろしてみたり、継竿に引掛を付けて、探つてみたりしたが、場所は、生憎と思いのほか水深があつて、そんな楽な手段では揚りそうもなかつた。

医者 of 玄庵が、頻りと、この辺を徘徊した。永代橋の上から考えこんで見ている姿も何度も見た。まだ陸にも川にも往來の少い夜明け方小舟で、何かやっている所も、一度や二度ならず、山岡屋は見つけた。

五月雨になると、川は殆ど毎日濁つて、水もずっと殖えていた。当分は手も出せない濁流だつた。

山岡屋は、ぶらりと、玄庵の門へ訪ねて来た。

『先生、ひとつ診て下さいませんか。どうも又、持病のせいか、頭脳が重くて』  
と、力のない顔いろをして云つた。

『陽気がわるいでの……この入梅にゅうばいでは』

玄庵は、すぐ処方してくれた。碁盤を出して、挑いどんだが、山岡屋は、今日は碁もすまないと云つて、

『如何いかがでしょう、こんな日には、少し気散じに、辰巳たつみへでも行つて陽気に騒いでは』  
と、外へ誘つた。

好むところと云わないばかりに、玄庵は支度にかくれた。そして煎薬せんやくを自分で沸たてて来て、

『これを一杯飲んでゆくがいい。すぐ頭が軽くなろうで』  
と、すすめた。

山岡屋は、煎薬をのんで待つていたが、いつ迄、玄庵の姿が出て来ないので、

『先生、まだですか』

起ちかける、がくつと、両手をついて、首の根を前へ折るように垂れてしまった。――  
ご、ご、ご、ご、……とその唇から黒い血を吐いているのである。何か叫ぼうとするらしく畳へ爪を立ててもがいていた。

縁日へ行つたと婆やがいうので、玄庵は、二階で待つていた。初夏の若葉のにおいがする晩だった。

『婆や、この頃は、山岡屋も、かまきりも、ちつとも顔を見せんもう』

『ほんとに、皆様が、ぼつたりなんでございますよ。とてもこれでは、商売にならないというので、私にも、とうとうお暇いとまが出てしまいました』

『ほ。ここを仕舞しまうつて』

『あ……お帰りなさいました』

婆やと入れちがいに、お可久は、縁日で買って来た葵あおいの鉢を持って上つて来た。

それから、酒が出て、玄庵は晩おそくまで話しこんでいた。頻りと玄庵は今夜は彼女に返辞を迫つた。お可久の返辞次第では、今の高橋の門戸をたたんで、大阪へ出て、家を持つとうというのだった。そして、近いうちに大金が入るから、それを機しにもつけ加えて云う。

『泊つていらつしやいな……』

お可久のほうからそういつた。玄庵は、杯おを措くと横になつてしまった。

——だが翌日になつても、翌々日になつても、玄庵の姿は、この家から出て行かなかつた。

その代りに、薊あざみの姿がチラチラ見えた。婆やは、風呂敷づつみを持って、暇乞いをして自分の家へ退さがつて行つた。——翌晩、薊は、お可久にも手伝わせて、畳を上げて床下を掘つていた。血みどろになつた玄庵の死体が、蒲団ぐるみ、土の下にかくされた。蟬せみ燭そくの白い斑点も、畳の下の秘密となつた。

碁会所だつたその小門に、やがて、貸家札が貼られた。——それから数日の後である。もう夏めいた月の冴えであつた。

大川は、しいんとしていた。水は、透きとおつていた。

旅すがたをした男女が、永代橋の上に立つた。

『だいじよぶかえ、芳さん』

お可久が川をのぞいていうと、薊は、自信のある声でいった。

『おれの生れ在所は、天竜川のふちだ。天竜川からみれやあ、こんな川は、まるで泉せん水すいみてえなものだ。泳ぎにかけちや、こう見えても、己惚うぬぼれじゃねえが、夏場よくこの河岸かし筋すじで師範すいしている何とか流の先生にも負けはとらねえつもりだが』

『おや？ …… 春作だよ』

『何、春作。 …… 春作が何処へ来たつて』

『叱っ』

お可久は、男の袂たもとをひいて、知らぬ振を装おいなながら、橋の欄干の外へ顔を出していた。ひよいと、振向くと、成程、喜多川春作が来るのだった。その春作の挙動も、此つ方を憚おどっているらしく思われる。橋を越えても、頻りと、河岸ぶちを行ったり来たりしている。薊あざみは、近づいて行つた。いきなり声をかけると、非常に驚いた様子で、春作は逃げかけた。跳びかかつて、薊は、彼の両手を縛り上げた。

『何しに来やがった。汝てめえなんぞが、野心を起したつて、無駄なこつた』

『わ、わたしは何も、決して……。そ、そんな大それた野心を持って居るんじやありません。ただ……』

『ただ？ …… 何だ』

『お可久さんに、一言、話をしたいと思つて、あなた方が今夜、花屋を出る所からお後を慕つて来たんです』

『何だと、俺たちを尾行つげて来たつて。 …… はははは、呆れけえつた男だ、おれとお可久と、



こうして仲よく旅立つ姿を見ても、腹も立たずに、指を啜くわえて、後から見ているのか』  
 『私は、一言ひとこと、お可久さんに最後の事を云いたかつたんです。それで、諦めるつもりだ  
 ったんです』

『こいつにやあ、刃物を出す気にもなれねえ。お可久、おれが川から金を揚げてくる間、  
 何とか一言云つてやんねえ、生霊が取ツ憑つくといけねえや』

『いやだよ。私は……』

『罪ほろぼしと思つてよ』

薊きやはんは、春作の体を、橋の欄へくくりつけて、そこへ、自分の帯を解き初めた。

脚絆きやはんわらじは元より、着物をすべて脱ぎ捨てる。そして、腹巻一つの真つ裸になると、  
 魚のように、身を翻ひるがえして、川の中へ躍おどり込んだ。

### 三

大きな波紋の下に、薊きやはんのすがたは暫く沈んでいた。

天竜川育ちと、自分でも豪語ごうごしていたが、彼の水の中の動作は鮮やかであった。

水深の底の底まで、月明りが届いていた。そこらにこぼれている白い碁が数えられる位なのだ。薊は幾度も身を逆しまにして、そこに眠っている黄金の網の袋へ、手をのぼした。何十回目かで、彼は、遂につかんだ。

『七百両』

と、水の中で彼の心臓はさげんだ。

だが——それを確乎しっかと抱え込むと、今度は、体が彼の思うように浮かなかつた。金が、何尺か河底かていの沼土を離れたと思うと、再び、体のほうが、金の力に持つてゆかれて、ぶくぶくと底へ引き込まれる。

『七百両だ』

そればかりを、薊は思っていた。水は、真つ黒に濁って、彼をつつんだが、彼は掴つかんでいる物を死力をもつて掴んでいた。

#### 四

夜明が近くなる——

半刻はんとぎ、一刻と経たつても、薊あざみは浮いて来なかつた。

遂に、二刻も経たつた。

『死んじやつたのか知ら？』

お可久は、ぞつとした。青い青い水面のさざ波は、魔まの淵ふちを思おもわせた。

『——お可久さん、お可久さん、後生ごせいです、この繩を解といて下さい。そして、私はもう諦あきらめているんだけど、町画師まちがしの春作はるさくというしが無い男おとこが、昔むかし、江戸えどの裏町うらまちの隅すみツこで、凝じっと、お前まへさんを想おもいつづけていたという事ことだけを覚えていておくんなさいね。……それだけだ私が、云いいたかつた事は』

『春作さん！』

お可久は、彼の繩なわを解といて、そして、手頸てのくぼを引ひつ張はるようようにして叫こんだ。

『おまえと暮くしましょう。他国たこくへ行いつて』

——だが、その時とき、永代橋えいだいばしを踏ふみ鳴ならして、ここへ一瞬いつしんに駈かけつけて来た町方まちかたと捕手とらは、逃げかけるお可久おこひさを追おいつめて、

『おふさ！ もう汝てめえの仮面かめんはきかねえぞ』

と、高手たかて小手こてに縛からめてしまった。

その人々の騒々さわさわと云っている言葉を綜合してみると、お可久という名も、大名のお部屋様だったなどという事もみんな嘘で、ほんとは、日光山の中院の僧の隠し子で、土地の宿屋の娘という事になっていたが、性来の毒婦どくぶがた型の女で、家を飛び出してからは上方は勿論、長崎から諸国を流れあるいて、行く先々で、豪華な悪の生活をしていたという札付ふだつきの女であるらしかった。

春作は、裸足はだしのまま、本所の家まで走って帰った。生きている顔いろもなかった。

戸を閉めきつた儘、彼は、二日も外へ顔を出さなかった。けれど、彫兼ほりかねのおやじが、その日も又、催促に来て、外から戸をたたいた。

『あ、描けているよ』

春作は、ふた晩も寝ていない眼をして、十数枚の画稿がこうを、すぐそこへ持って来て渡した。

『え、ほんとですかい？』

と、彫兼すら眼をみはって疑った。

(昭和十一年三月)





# 青空文庫情報

底本：「吉川英治全集・㊦ 新・水滸傳（二）」講談社

1967（昭和42）年6月20日第1刷発行

初出：「富士 臨時増刊号」

1936（昭和11）年4月

※初出時の表題は「魔金」です。

入力：川山隆

校正：門田裕志

2013年10月6日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

# 魚紋

吉川英治

2020年 7月18日 初版

## 奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>  
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。  
<http://tokimi.sylphid.jp/>